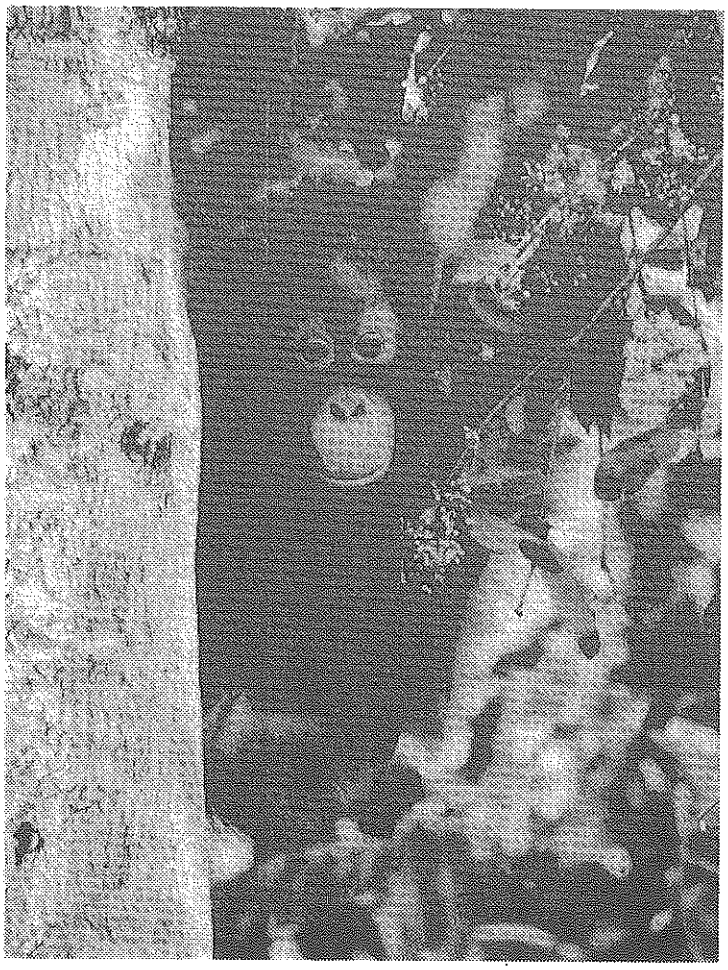
Save The Tropical Forests

ウータン

Hutan 100

森の通信 2011.4.29



CONTENTS

3P…… people 20

4P… ウータン 2011
活動方針

5P… 100号記念寄稿
大西裕子
原田 公
平井英司
峠 隆一
大田伊久雄
西岡良夫
大平治子
春日直樹

14P…… タンジョン・パラパン村での村おこし
市川美穂

18P… 世界の森林ニュース

19P… ウータンから
井下樺子

Save the Tropical Forests
ウータン Hutan
森の通信
100
2011.4.29

＊＊＊東日本地震・津波(Tsunami)にカンパを！　100号発行を前に＊＊＊

100号の巻頭は、長年通信を作成している編集長の永田さんに全て記してもらう予定だった。

3月11日、突然の「東日本地震・津波」が発生。同日の午後5時過ぎ、Telapakのヤヤット氏から緊急電話、BOS(ボルネオ・オランウータン・サバイバル)のエミリアさんからもメールあり、「大阪は大丈夫」と返答。Friends of National Parks FoundationやWetlands Interのニョマン事務局長、元Titianのユユン氏らからもメールをFFる。至急の連絡が有難い。神戸阪神大震災もメンバーがからがら逃げたり、編集長の父母の実家も被災し、共同事務所の仲間が1人死亡。今回、メンバーの親族も東北地方で被災しているが、とりあえず元気だ。この地震で当時、約1年森林保護の活動を変え、超寿命化の住宅への提案をした。

スマトラ地震時もインドネシアNGOs、JATAN, FoEJapanとカンパを実施した。緊急時だからこそ、事務局会議を待たず、多くの方にカンパ等を求めたい。森林保護も必要だが、地震・津波の被災に対してカンパ等だ。少し落ち着いてからのボランテイアも危急な課題だろう。職場や赤十字等からも。　(西岡)

●民間の知恵を現地へ……　NGOの役割は大きい。

「ウータン」にとって記念すべき100号発行を前に　とんでもない東日本大地震
大津波、原発事故が起こってしまいました。
今、日本中の人々が、いや世界の人々に　私に何ができるか？と考え行動されてあります。　そんな私たちの力を現地に送って　被災されて皆さんに元気をとりもどしてほしいと心から願っています。
まだ少し先の話になるが、ひとつ気がかりなことがあります。
阪神大震災でもそうであったように、膨大な破壊された家屋の残骸の処理です。　建っていた木造の家屋は全てといっていい程　津波によってバラバラになってしまっています。　かたづける際に現場にクラッシャーを導入し　チップ材を工場でパネル材にできないか？　とても むずかしいが不可能かもしれないが、全てを焼却するしかないのでしょうか？　ふと米国で伐採現場でチップ材にしてしまう大型の車をみたことを思い出して　こんな方法どうかなーと思っています。
とにかく「がんばれ東北，がんばれ日本！」「きっとできる復興！」(永田)

【ウータン・活動報告】

2010/12・15－18　第47回ITTO(国際熱帯木材機関)理事会へ参加＊西岡、石崎
12・21　通信「ウータン99号」発送
2011/1・15　「オランウータン保護から温暖化防止を考える」講演＊西岡／高知温暖化防止センターで
1・29　ウータン総会
2・5-6　ワンワールド・フェスティバルに参加＊メンバー多数
2・10-17　石崎、高坂がインドネシア中カリマンタンのタンジュン・プティン公園で植林等へ

People⑳ save! the World's Forests

原生林保全、違法材停止活動から、[オランウータンが住める森作り]支援をする
無茶苦茶なウータンのメンバーとまともなメンバーとゲスト——20周年記念から　photo by ?

(左上から＊ゲストのFoEJapan三柴さんと大阪大学・神前さん、春日、柳下、石崎、中段の左＊米沢、笠原、藤村、佐久間、下段左＊ゲストの琵琶湖ネット・寺川さん、大西、西岡、井下、永田)

上左＊奥村、相楽、左2＊中村、左3＊篠宮、中＊村上、高坂、右3＊日下部、右2＊前川、右＊大平
(ラミン停止大阪集会、同じく東京集会、Jok氏講演会、タンジュン・プティン公園での植林等の写真)
写真漏れのメンバー、すみません。　(ゲスト以外敬称略)　写真撮影：ウータンの各メンバー

1987年12月にウータン結成を考えて、翌1988年2月に設立。原生林保護やラミンなどの違法材停止から今、[オランウータンが住める森作り]や泥炭湿地保全にむけての森林保全や植林も取組み出しています。HUTAN Groupは今、面白い！現在、事務局に参加したい人は来てや、大募集です! NGOsが活発なインドネシアのNGOs等と連携した森林保全を進めていこう。　(文・西岡)

2011年ウータン活動方針　国際森林年に向けて　　事務局長・西岡良夫

1、「原生種植林・泥炭湿地保全」と[オランウータンが住める森作り]支援・・タンジュン・プティン(TP)国立公園等

1)[オランウータンが住める森へ]タンジュン・プティン・・FNPF(Friends of National Parks Foundation)が拡大計画

A)現状・・①2002年から激減で生存の危機・・約7万頭→現在スマトラで激減、サバ等減少で5万頭？

②タンジュンプティン公園で09年で火災1haウータン分植林、FNPFが9万本再植林の確認

③アブラヤシ開発社が違法伐採意向ー*FNPF自費で土地購入・・支援、他OrangutanCSPと連携

④BOSF(ボルネオ・オランウータン・サバイバル)のマワス、サンボジャ保護地拡大・・良い傾向

B)行動・・①TP公園の再植林作業、②野生オランウータン戻り調査、③TP村人と交流、④火災と対策確認

⑤現地再調査は6月頃にTP公園、マワス等へ、⑥違法伐採のラマンドウ保護区の事情確認、

2)[オランウータンの住める森作り]の展望・・①TP国立公園で野生が戻るケース、②Mawas,Samboja の取組み

③問題点・・i)オランウータン減少等のデータ収集、ii)資金、体制、日本から出来ること等の検討

④生物多様性(CBD)10年計画への働きかけ・・森の回復、泥炭湿地保全・CO2排出量減もPR

3)原生種・泥炭湿地保全—①TP公園で植林、②Wetlands,FNPF, BOS等に聞取り・冊子骨子作成依頼?

③インドネシア10億本植林計画・・ユーカリ、ジメリナ等の早生樹?は泥炭地保全、生態系回復に繋がらず

④原生種植える必要性・・i)泥炭湿地保全, ii)生態系回復、iii)オランウータン等の生息地保全、iii)日本PR

2、海外違法材調査・・・2010年の国際森林年へ「ボルネオ島の違法材取引停止宣言」は困難に・・だが追求！

1)「違法材の海外調査」ーボルネオの違法材取引激減・継続調査(280→20万m^3＋α)

A)現況・・①西カリマンタンーサラワクSTIDC,Harwood(海・陸上主ルート)の密輸は最盛期より約9割激減!

②山岳地(バツン・ケリフン国立公園)でサラワク企業T Ann,RH等違法伐採(委託調査で判明)

B)行動・①インドネシアNGO等に調査一部依頼、②情報交換、③今後共同調査等で、波及効果大?

④東カリマンタンーサバ・・11年再調査を・・船で月数回と陸路(07年聞取時15回等)の再確認

2)2010年より密輸材停止拡大時・・①一時的「ボルネオ島の密輸材停止」表明か困難? ②成果を政府等へPR

3、合法材使用推進・フェアウッド利用への活動・・・「違法材不使用へ自治体・企業キャンペーン」

1)合法材推進・違法材排除の調査(主に自治体)—政府も2020年に国産材50%使用目標へ

A)現状・・九州7県以外に合法材推進が拡大・・兵庫、大阪等遅れる自治体、他進捗度等で、合法材の推進を!

B)行動・①広島・九州と兵庫・大阪・奈良県等へ話合い7-9月？ ②ウリン調査等はインドネシアの状況で再開

③政府へ他団体(FoE、JATAN等)と輸入材へ罰則規定あるレーシー法適用の再申入れ

2)「ウリン保護を!キャンペーン」(公共事業でウリン多使用)・・一時中断-再開検討

A)現状・・08年インドネシア工業省が突然一部輸出許可(06年林業省がカリマンタンの輸出禁止措置)

B)行動・・①インドネシア政府の方針変更時、異常な伐採判明時—再キャンペーン化・・多使用の企業からか

3)合法材推進PR・優良企業のPR等・・①永田さん等の家具作りPRカタログ、②国産FSC材推進の企業等

③インドネシアで違法材使用無と判明企業、④違法多いサラワク材の不使用決めた企業・・・ミサワハウス等

4、その他の取組み

1)地球環境基金助成(426万円要望350万？)、 2)財政強化、 3)HP改編(現在http://hutang.jimdo.com/

4)組織内担当変更、 5)ウータン新パンフ(5月作成)など冊子作成・・残500部・内容改定の必要

6)違法材問題やオランウータン保護へ他団体、大学等でPRを—講演会等の依頼、集会依頼

7)合法材・違法材資料収集・・i)合法材・・FoEJapan、全木連等の情報、ii)他のアジア、欧米、南米情報

iii)先住民情報・・Tom氏(サラワク)、熱帯林保護団体(Amazon・南さん)、パプア守る会(PNG清水さん)等

8)原生林破壊・先住民問題—資料収集・・国際森林年、Rio+20(2012年)へむけ・・違法材停止・合法材推進もPR

9)国際森林年・・国際熱帯林週間(10月3－4週)にゲスト招聘2名?—泥炭湿地問題＋オランウータン保護

＊＊＊≪通信「ウータン100号」記念≫＊＊＊

100号に寄せて　—活動は明るく楽観的に—

大西裕子

2010年9月、カリマンタンのタンジュン・プティン国立公園への旅に誘ってもらった。カリマンタン東部のマハカム川流域に西岡さんたちと行ったのはもう20年以上も前だ。今回は西部のセコニア川流域で、近頃西岡さんが何度も訪れている場所らしい。

9月4日：前日に関空を出発して3回（途中のジャカルタで1泊）飛行機を乗り換えて昼前にようやくパンカランブン空港へ到着。FNPF（Friends of the National Park Foundation）のバスキさんの出迎えをうけ、河口の船着き場のあるクマイへ移動。

船着き場で待機してくれていたボートに乗ってまもなく昼食となった。実は今日は私の誕生日なのだ。西岡さんと京大院生の日下部さんが祝ってくれたが、アルコール抜きの誕生祝いは成人後初めてのことだ。でも天気は雨。

下船して雨の中を約1時間、徒歩でオランウータンの給餌台へ急ぐ。それでも給餌台を遠巻きにして観光客が集まっている。ここに現れるオランウータンはもはや純粋な「野生」とは言えないのだろうが、それでも初めて見る檻のない彼らの姿には心が騒ぐ。給餌台上に山盛りにおかれたバナナを可能な限り口にくわえて持ち去ろうとする姿はユーモラスではあるが、少し悲しくも見えた。

移動中に蚊の猛攻を受ける。「雨の中でこんな蚊にやられるのは初めてや」と半ズボン姿で刺され放題の西岡さんが珍しくぼやく。

9月5日：5時半起床。この有名なホテルはテングザル等の生息地のまっただ中にあるので、早朝からテングザルの叫び声があちこちから聞こえる。連中のマーキング行動のためか、外気はとてもおしっこくさい。急いで朝食を済ませ、バスキの案内で彼らが植林を行っているブグルという場所へ行く。この日も雨だ。私は恐ろしいほどの「雨女」なのだ。雨中の移動で日下部さんは蛭にもやられてズボンを血で染めた。西岡さんと私も足を1か所ずつやられた。蚊よりも蛭のほうが苦手だ。

キャンプリーキーでリハビリ中のオランウータンを戻すための十分な広さの森が周辺にないので、バスキらはせめてコリドー（緑の回廊）を作り出そうと、国からの援助を取り付け、かつて違法伐採に従事していた村人を3か所の植林活動に誘導しているのだ。

20数年前にマレーシア、サラワク州のビンツルで、あの宮脇昭氏が指導する某商社の資金による在来種の植林実験では、たった50ha の植林に莫大な費用がかかっていたことを思えば、在来種による森の再生がどんなに難しくて時間のかかる仕事か・・・。しかし、タンジュンハラパンの村人たちが森の中で採取した10cmをこえる大きなウリンの種を発芽させたたくさんのポット苗を前に、活動のすすみ具合を説明してくれるバスキの、そのあくまでも明るい笑顔に、「悲観的では何も進まないのだ」と改めて思う。20年以上続いているウータンの活動も同じことなのかも知れない。100号おめでとう。

《通信「」ウータン100号記念》

「ウータン・森と生活を考える会報」 100号ーNGOで連携強化を

熱帯林行動ネットワーク(JATAN) 事務局 原田 公

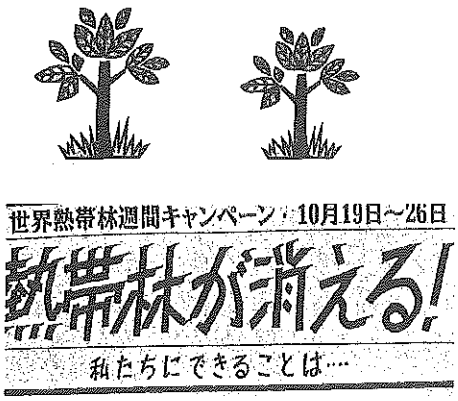
「森の通信」創刊100号、おめでとうございます。記念すべき100号を数えたことに、心よりお祝い申し上げます。同じ、日本の熱帯材消費の問題に取り組んでいる団体として心から敬意を表すとともにお喜び申し上げます。実は自分がJATANの活動に関わるようになったのは2001年からで、事務局に入ったのは2007年です。「東のJATAN、西のHUTAN」とよく言われたりしますが、事務局長の西岡良夫さんの活動歴と功績に比べたら自分の場合は赤子も同然です。

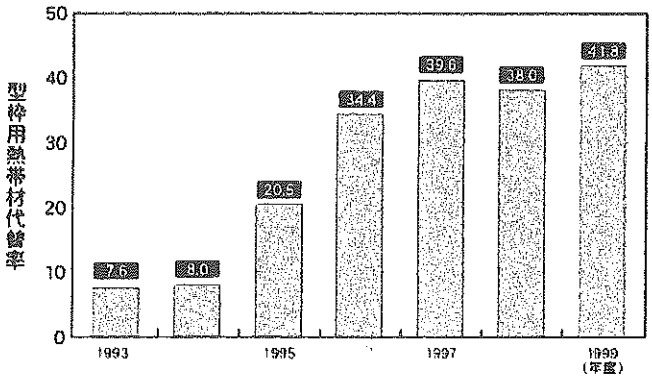
あらためてニューズレター「森の通信」とJATANのニューズレターとを見比べると、扱うトピックはもちろん紙面の体裁や編集方針でも或る種の相似関係があることに気付かされます。これは偶然の符号というよりは、これまでに二つの団体の協働活動を通してさまざまな人的交流があったことを伺わせるものです。まさに「姉妹関係」といった良好な関係が維持できたことの証であると思います。

個人的にはやはり、【密輸材ラミン材使用停止宣言】の実績には大いに感心させられました。地道な活動と不断の熱意がもたした成果であり、多くのことを学ばせてもらいました。また、数年前に福岡・佐賀両県に位置する大川地域で家具用木材調達の調査を一緒にさせてもらったときにHUTANメンバーにも同行をお願いしましたが、その専門的な知識と幅広い情報力に活動の質の高さを見た思いです。

HUTANとJATANはともに1987年にスタートしました。JATAN Newsletterの最新号は85号を数えています。会報発行を通しての継続的な広報活動にJATANも一層、力を入れていかなければならないと思っています。(弁解めきますが、JATANでは2005年4月まで、JATAN NEWS Updateという補足号を35号まで出していました。)

日本の市場における調達木材の環境配慮も、熱帯国の違法伐採も、また森に依存する現地住民の窮状も根本的な解決に至っておらず、むしろ経済と貿易のグローバル化が進行するに連れてこうした問題の様相は複雑になっています。この意味からも多くのNGOは連携を強化していかなくてはならないと思います。HUTANの益々の活躍を祈っています。





型枠用熱帯材代替率の推移

《通信「ウータン 100 号」記念》

「ウータン」と私

JATAN 名古屋　　平　井　英　司

ウータンの西岡様およびウータンの皆様、機関誌発行 100 号おめでとうございます。

100 号と簡単に言葉で言及することはできますが、私にとっては驚嘆するばかりです。JATAN 名古屋も 1990 年代までは、機関誌を作成していましたが、パソコンの普及に伴い、記事内容に新鮮さがなくなり、また、なかなか原稿を依頼しても提出いただけない等の状況が重なって、結局、2000 年以降は休止したままです。機関誌を発行することの大変さを認識しているだけに、100 号というのは驚き以上のものです。編集担当者の方の負担が真に想像されます。

ところで、私とウータンの出合いは、1990 年頃に、名古屋市内の熱田青年の家で西岡さんのお話を伺った事が始まりかと思います。当時、JATAN を創設した黒田さんの協力の下、1989 年に JATAN 名古屋が発足しましたが、私は、特段、熱帯林問題に関心があったわけではなく、人権、環境、平和に関するテーマであれば、金太郎アメのように集会に参加していましたので、新たな課題の発見の一つにすぎませんでした。したがって、JATAN の正式名称さえ理解していない状況でした。単なる名前のみを登録した会員で、さほど積極性があったわけではない私が、熱帯林の問題に深く関わっていったのは、西岡さんの考え方、行動に魅了されたといっても過言ではありません。ウータンの会員の皆様には失礼な表現かもしれませんが、「ウータン＝西岡さん」というイメージがあります。ウータンには、専従スタッフの方は不在と認識していますので、西岡さんをはじめ皆様が、仕事をもちながら政府、自治体、企業等と交渉されてきたことには、大変な時間や労力と経済的負担が必要であり、その活動の継続性には大変敬服しております。

なお、その後、私は、環境問題に深く関わることになりましたが、1990 年代のサラワクキャンペーン委員会が中心となって進めた自治体キャンペーン、2000 年初期の選挙掲示板の取組み、また、近年ではラミン調査会による違法材の追放等、ウータンの積極的な取組は随分触発され参考にさせていただいたしだいです。

自治体キャンペーンを展開していた頃は、全国に熱帯林問題に取組む団体が多数ありましたが、近年では活動団体も少数になり、寂しさを感じます。こうした状況ながら、今なお、熱帯林保護の中心団体として以前よりも、より高度な活動をされていることに大変感服しております。また、新たな会員も増え、新旧が交代できるような状況にあることを羨ましく思っております。市民にとって魅力ある団体を一層目指され、熱帯林問題の中枢として、市民をリードされることを切望しております。

またサラワクに通おう

峠 隆一

ウータン 100 号おめでとうございます。専従スタッフもいない組織が、雨の日も風の日も定期的に機関誌を出し続けたのはある意味エライ！ところで、私とウータンとの付き合いは案外古く、1990 年に始まっております。

その前年の 1989 年に初めてサラワクを訪れ、熱帯林のなかで 2 ヶ月ほどを過ごしていた私は「ここに一生関わろう」と決めていました。以来、22 年が経とうとする今もサラワクに通い続けているわけですが、私は森に住む先住民にほれ込んでしまったのです。

ボランティアとか福祉とかの言葉がなくても、老若男女、障害のある者ない者、一人暮らしと大家族、気の合う者合わない者のすべてが自然と支えあうその豊かな生活に。そして、地域や家族を大切にしながら、商業伐採や大規模プランテーションなどと闘うその姿勢に。

1990 年春のこと。私は東京で開催された、来日していたサラワク先住民のシンポジウムに出かけ、そこで初めてウータン代表の西岡さんと出会いました。じつは私はそのときまで大阪に行ったことがなく、大阪人がどういう人たちかを知りませんでした。漫画では、「男の3人に1人は黒スーツに白いエナメルの靴を履いている」,「パチンコの玉の出が悪かったら暴動が起きる」,「恥知らずのパワーで生きている」,「男が二人揃えば漫才が始まる」など、まあ、最後の事例を除けば、大阪に対して間違ったイメージが溢れていたのです。

とはいえ、生まれて初めて出会った大阪人が西岡さん。「これが大阪人か」と、やはり「恥知らずのパワー」は本当だと思ったものです。事実、この後、西岡さんが動き出そうとしている電車を無理やり止めたときには「スゲー」とある種の感動を覚えました。

ところで、西岡さんと初めて出会ったとき、私はサラワクへのスタディツアーを予定しておりまして、これを知った西岡さんは「ウータンからも二人連れいていって！」とお願いしてきたのです。私に断る理由はありませんが、この時に参加した二人のうちの1人が朝も昼も夜も酒を飲み続ける元教師 K さんと、N さんでした。

スタディツアーはその年の8月に催行されましたが、この K さんとの出会いで、やはり、その誰であれ恥知らずのパワーと笑顔で、酒の勢いでヨイヨイと相手に迫っていくその姿勢に「やっぱりこれが大阪人だ」との印象を確かなものにするのでした。K さんと、サラワクのミリ市の食堂でメシを食っているとき、酒好きの K さんは店員に断りもなく「お、これもうまそうやで！」と、棚からいろいろな酒を引っ張り出してはテーブルに並べていたのですが、そのなかの真っ白いドブロクを指差し、ウエイトレスに「お姉ちゃん! これは何という酒や！？」と尋ねました。ウエイトレスはニコリともせずにこう答えたのです――「お客さん、それは豆乳です」。店の中は日本人もマレーシア人も大爆笑となったのでした。

さて、私は当時、背中に羽が生えたかのように自由にサラワク中を歩き回っていました。ところが、この羽がもぎとられたのが 1993 年末です。あろうことか、私が先住民の反政府運動を扇動しているとのデマが飛び、それを真に受けた現地当局は私を1週間拘束したのです。詳しいことは書けませんが、気が狂う2歩手前くらいまでに精神状態が追い詰められました。幸いにも、証拠が出るはずもなく、1週間で追い出されましたが、これがトラウマとなり、恐怖感でその後 5 年間もサラワクに足を踏み入れることができなかったのです。

しかしその間も、サラワクでは商業伐採に加え、油ヤシプランテーションが急速に拡大し、多くの先住民が闘っていました。5 年経ったとき、私は決めたのです。「最後になってもいい。もう一度だけサラワクに行こう」と。

そして感謝すべきは、このときに同行を申し出てくれた西岡さんであります。

私が、現地の NGO と連絡を取り合い、安全に、かつ合法的に入州できるルートをいくつか教えてもらい、西岡さんとサラワク州に入るのです。このときですが、入州の1時間前、私は拘束時の記憶がフラッシュバックし、心臓はドキドキと自分の耳に聞こえるくらいの鼓動を打ち、両手のてのひらは脂汗がとどめなく流れ「ああ、来る

のじゃなかった」と後悔していました。そんな私の心配をよそに、西岡さんは「いやあ、いよいよサラワクやなぁ!」と能天気そのもの。私はその能天気さに救われたと思います。

入国管理事務所はプレハブ小屋に係員が1人いただけで、あっけなく通過することができました。西岡さんは10日間ほどで帰国しますが、1ヶ月間滞在した私は、5年前に心配をかけた人たちの場所を巡る旅をしていました。今思い出しても、あれは私の人生で最高の旅だったと思います。再会した先住民族の男性たちの「警察なんか気にするな。お前は俺たちが守るから」との言葉に元気をもらい、女性たちの「あなたが捕まったとき私たちは泣いた。本当に泣いた」との言葉に涙し、「またサラワクに通おう」と決意するのです。

それにしても、22年も関わっていると、当たり前のことですが、私も先住民も歳をとります。出会った頃は小学生だった女の子たちが今では 3、4 人の子持ちになり、森の生活のイロハを教えてくれた老人たちは次々と他界しています。特に、2 年前の 11 月、私を本当の息子のように接してくれた「お父さん」が亡くなったのは悲しいことでした。

お父さんは私を毎日のように森のあちこちに連れていっては、森の恵みを肌で教えてくれた人でした。出会った頃は60歳以上だったのかもしれませんが、その体力は20代の若者もかなわないほどで、村では「第一勇者」の称号をもらっていました。そのお父さんが2年前、街に住む娘の家に滞在していたときに体調を崩し入院したのですが、家族が「病気ではない。ただの『老い』だ」と、お父さんを娘の家に引き取ったのです。しかし、私がその年の8月に再会したときには既に植物状態となっていて、11月に行った時はその2週間ほど前に亡くなっていたのでした。

お父さんは、過剰伐採に反対する道路封鎖で闘い、投獄された経験ももっています。町に住んだことはありません。そのお父さんが、植物状態になる少し前に家族にこう叫んだそうです――「オレを森に帰せ。街はオレが住む場所じゃない。森がオレの生きる場所だ。帰してくれ！」

この話を聞いて、そうか、お父さんは森が好きだったんだ、森に生かされていたんだと私は初めて実感できたように思います。

その森が今、急速に失われつつあります。バイオディーゼルの世界的な普及も追い風に、油ヤシプランテーションはますますその『開発』に火がき、パーム油高騰を背景に、サラワクでは今、猫も杓子も森を切り開く、ゴールドラッシュならぬグリーンラッシュが起こっています。昨年まで確かに森だった場所は今はハゲ山に姿を変え、一本残らず同じ木だけを植林されていくのです。

このプランテーション問題が、それまでの商業伐採と異なるのは、丸太の輸入だけなら相当量を輸入する日本一カ国だけの運動でもそれなりに影響力をもちえたのに、パーム油は先進国も途上国も関係なく世界中に輸出されている以上、どういった運動が効果的なのかの答えを見つけにくいことです。

ところが、ヨーロッパはやはり見習うべきですね。たとえば、オランダでは、持続的開発をしないプランテーション開発には、銀行が「融資をしない」と決定。スイスでは、巨大流通網をもつ小売店チェーンがパーム油を使わない商品を開発＋普及。 これらの動きを作ったのは、すべて市民運動が発端です。

日本でも、ヤシノミ洗剤でおなじみ、サラヤが人権や環境に配慮して作られた認証パーム油を輸入し、昨年から洗剤に加工し販売。さらにサラヤは NPO「BCT(ボルネオ保全トラスト)」を設立し、サラワクの隣のサバ州で、プランテーション開発が行われても野生動物が生きていける保護区設置にも関わっています。

さらに世界各国に支店があるラッシュジャパンもパーム油を使わない石鹸を開発し、キャンペーンを開始。

動かないと思っていた山が動くかもしれません。

私も、プランテーションに関するある冊子を仲間と作る予定ですが、冊子つくりのあとは、何も知らずにパーム油を大量に使っている組織と対話しながら別の道を探っていくつもりです。

私がサラワクで受けた数々の教えや恩は直接にはサラワクの人たちには返せません。しかし、この日本にいるからこそできることがあると思います。ウータンともますますいいおつきあいができればと希望しています。「ウータン 200 号」に向かって前へ前へと歩まれてください！

****《通信「ウータン100号」記念》****

「違法伐採問題解決のために森林認証制度の普及促進を」

大田伊久雄（愛媛大学農学部教員・森林政策学）

ウータン 100 号おめでとうございます。西岡さんをはじめメンバーの皆さんが 20 年以上にわたり営々と積み重ねてこられた努力に心から敬意を表します。自治体キャンペーンという手法で熱帯材使用の削減を実現し、さらに最近では違法ラミン材の輸入停止を達成するなど、小さなグループの大きな仕事が世の中を動かす力を発揮していることは知る人ぞ知る快挙であり、ウータンはまさに「関西の星」であります。

熱帯地方に限らず、経済的に困窮であったり政情が不安定であったりする国における森林破壊、とりわけ違法伐採問題の解決は簡単ではありません。森林という資源はどこにでも存在し、チェンソーが1台あれば（無くても）誰でも手軽に伐り出して売る事ができるという点で、鉱物などの天然資源とは異なり違法な採取が簡単だからです。数年前、国際学会で出会ったグルジア共和国の森林官は、「自分の国の国有林が今どうなっているのか誰にもわからない。」と嘆いていました。ソ連から独立したものの政情が安定せず、ロシアンマフィアの暗躍で森林は伐られ放題だということでした。地元で暮らす人々は生活に余裕がなく違法な仕事でも金が稼げればせざるを得ない状況にあり、武装集団が見張っているために森林官が伐採現場に近づくこともできないということでした。

さて、世界的な森林の危機に対し伐採反対の実力行動をとっていた環境保護団体は、1990 年代に入り市場原理を利用した前向きな解決策を考案します。それが森林認証制度です。その嚆矢となったのが、WWF を中心に木材業界や先住民団体などを巻き込んで作り上げた制度「森林管理協議会（FSC）」です。環境・社会・経済の 3 つの視点からみて持続可能な森林管理を行っているかどうかを審査し、合格した場合にはそこから生産される木材に認証ラベルを与えることで市場での差別化を図るというのが森林認証制度の骨子です。

2010年12月現在におけるFSCの認証森林は、世界81ヶ国で1億3千万haに広がっています。すでにヨーロッパでは PEFC など他の森林認証制度を含めると全森林面積の過半数が認証を受けており、市場での認証木材の認知度も高まっています。しかし、最初から一般市民が森林認証に注目していたわけではありません。環境保護団体が行った流通業・小売店など木材を扱う企業への認証材の普及啓蒙運動が功を奏した結果として、現在のような高い認知度に結びついたのでした。ウータンの皆さんが、ラミン材問題において取扱業者や流通業者を狙い撃ちにしたのと同じ構図です。一般消費者よりも先に、企業の環境意識（社会的責任感）に訴える方が近道だったわけです。

違法伐採への対策として、私たち日本にいる一般市民ができることは、森林認証を一つの軸として、住宅・建設・流通など木材を大量に扱う企業に対して責任ある調達を求めることでしょう。もちろん、西岡さんのような国境なき運動家（？）には、今後とも現地と日本との架け橋となって活躍していただく必要がありますが、私たち一人ひとりができることは、ホームセンターで認証木材を注文するとか認証紙を使った名刺や手帳を使うとか、あるいは友人・知人に森林認証の宣伝をするなどといった日常的な行動ではないでしょうか。そうした地道な運動の輪を大きく広げていくためにも、今後ともウータンの活躍には大いに期待したいと思っています。

ラミンの苗/Tanjung Putting 公園で

【目標達成と検証、再度の計画】から【世代交代】にむけ　西岡良夫

マレーシア・サラワク先住民の森が切られ1987年に一斉の道路封鎖の事件で日本でもウータンも含めた熱帯林保護団体が出来た。1990年からウータン総会を開き、方針を立てた。日本が熱帯材輸入世界一であり熱帯林破壊が著しく、先に止めることから始めようと。森林破壊が植林の5倍の速度だから。

第1期は関西から【熱帯材使用削減キャンペーン】だ。商社や輸入木材企業に話しかけたが、当時の商社は【使用削減】に耳を傾けず、JATAN（熱帯林行動ネットワーク）と話合い、「自治体から変更してもらうほうが効果的」と結論して【自治体キャンペーン】を展開。ウータンは大阪市、大阪府に熱帯材削減を求める。アメリカNGOのRANの力添えでサンフランシスコ市長からの手紙（外圧）で、大阪市は削減を表明し、大阪府も削減施策を出す。1つ成功してから大阪府下全自治体を対象にと。次は「熱帯林きようと」等と近畿や他府県の【熱帯材使用削減】を求める。まず**〈1 自治体で取組みを決めてもらい、それを拡大〉の手法**だ。当時、自治体は熱帯林問題を知らず、「焼畑が原因では、、」とか、「削減したら地元住民の雇用がなくなる」との見解だった。1992 年頃から現地先住民の招聘の集会、国際的なデータ収集による熱帯林破壊の情報により、自治体も認識しだし「熱帯材使用削減」の施策を実施。環境基本計画にも熱帯林保護や熱帯材使用削減を盛込むのはリオ・サミットを過ぎた1994年頃から。

第2転換期は、多くの自治体で熱帯材使用削減策を盛込んだので、次は1996年からの【選挙板の熱帯材不使用を！キャンペーン】の開始。各自治体で並行的に取組みを依頼する**〈村型・横並び意識の掘り起こし〉手法**によるキャンペーンだ。大阪府下から先行し、次に都道府県を目標にし、その後全国の 30 万人以上の都市を対象にしたもの。**〈1 区画のキャンペーン〉**が成功して、次のステップに進むという方式を取る。このキャンペーンで、9割以上の全国の自治体が熱帯材から代替材にシフトした。

第3転換期。EU、米国、日本で熱帯材の使用削減がされ、森林保全へFSC認証も進むが、1999年になっても熱帯林破壊が止まらなかった。招聘したインドネシア NGO の Telapak の「ラミン材など違法材取引停止」講演会と港湾調査からが違法材停止活動への契機となる。違法ラミンを発見し、ウータンで［違法材停止へキャンペーン］を本格的に開始。当時 ITTO（国際熱帯木材機関）等の国際機関でも違法材調査や決議がされず、認証材を進める動きだった。それで2000年4月 G8 滋賀環境大臣会合で「違法材停止しないと保全はない」と橋本前首相や谷津農水大臣に訴え、ITTO 事務局長にも直談判の手法を取った。担当部署が［振り向かない時］は**〈ボス依頼〉や〈派手なデモンストレーション〉の手法**が有効だから。違法材問題も国際NGOsの働きで2002年から国際的に認識されだしたのだ。

違法伐採で死傷者が出て、【ラミン材停止キャンペーン】を開始。2004年から【やれば出来る！ 違法ラミン材キャンペーン】を実施。徹底的な調査、ネット情報、聞込み等で企業を確認した。**［成功には確信を持つこと］**だ。時には〈ハッタリも駆使〉し日本でも【ラミン停止キャンペーン】が成功。2008年に700社停止となる。ウータンはボルネオ島で密輸材停止活動を展開中で、密輸材は最盛期2000年の9割減。今まで思うことは詳細な調査が重要で、分析、そして国内外との情報交換・交流が上手くいったことだ。

第4転換期は、原生種の植林と「オランウータンが住める森作り」だ。今度は若手にリードしてもらい、泥炭湿地保全も含めたインドネシアの植林等の活動へと進んで行きたい。世代交代だ！頼むで一ぇ!!

ウータンはつづくよ♪どこまでも…

おおひら　ひろこ

**この記念すべき100号が皆様の手元に届くころ、東日本大震災で被災された方々・支援する人々・原発事故に関わる方々、すべての人達に少しでも多くの笑顔が戻っていることを、念じてやみません。
阪神大震災のトラウマも未だ消えぬ私ですが、これから自分にできる事はなにか考えながら暮らしていきたいと思います。**

十数年も前のこと、その頃インテリア関連の仕事をしていた事もあって、吉野の山・木材見学レポートなる物を初めて寄稿して以来、沖縄の事・コスタリカエコツアー・ボルネオ植林ツアーの記事を書かせて頂きました。
アットホームなウータンは、けして大きな団体ではない、予算も限られた中、小回りがきくとゆうのでしょうか、なんと着実に誠実に成果を上げてこられたことか・・。賞賛に値すると思います。これからも、身近な所から活動の輪が大きく大きく広がりますよう、エールを送ります！

そして、いま私がエールを送りたいのは、被災地の方々に加え、上関原発建設に異議を唱え、中止を求めて無償で活動されている人たちです。
原発にばかり頼った電力政策を進めてきたこの地震大国の日本に、福島原発の事故は、一石を投じてくれたのではないでしょうか。
原発建設工事の始まった山口県周防灘の上関周辺は、閉鎖的海域である瀬戸内海最後の聖域です。絶滅危惧種の生物や、天然記念物スナメリの生息地であるにもかかわらず、中国電力の環境影響評価は、この海域の特殊性に配慮しない問題の多いものであった為、日本生態学会・日本ベントス学会・日本鳥学会が揃って異議を唱えています。
「長島の自然を守る会」では、長年に渡って特有の自然をみつめてこられ、汚れのない豊かな海を子供たちに残そうと祝島（いわいじま）の漁民の方々は、保証金を受け取らず、30年反対運動を続けてこられました。
祝島は、原発建設地である長島上関の海のすぐ向かい側に位置し、映画「祝（ほうり）の島」「みつばちの羽音と地球の回転」に描かれました。
祝島の無農薬ビワ茶や海産物など、HPより購入できます。
スウェーデンでは、80年国民投票で新規の原発は造らない事を選択し、電力を自由化しています。日本も同じ森林国。CO_2排出削減に寄与する木質バイオマス燃料開発に、今こそ予算をかけるべきではないでしょうか。
国民病といわれる花粉症も解消できるぞ！一石二鳥だあ!!　・・とまあ、ひらりんのつぶやきはこの位で。***「100号記念ひらりんサプライズ企画!!***

「*～瀬戸内海・上関の生物多様性～奇跡の海*」南方新社　出版
瀬戸内海の生命線のこの海を守るため、研究者たちの良心にかけて、手弁当で調査した結果を本にしたものです！陸にも海の中にも生命の森が！
ひらりん独自にこの本を9名の方にプレゼント！応募方法は、巻末を見てください。

≪通信「ウータン100号」記念≫

「今年は国際森林年」

2011年3月1日　　春日直樹

Ⅰ」COP10の成果を具体化する

昨年10月、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が名古屋で開催され、47の決議を採択した。　大別すると　①2010年以降に条約が目指す全体目標である「愛知ターゲット」＝新戦略計画2020年目標。②遺伝子資源へのアクセスと利用から生じる利益の配分に関する議定書「名古屋議定書」。　③目標実現のための「資金動員戦略」の3本柱であった。

2002年のCOP6で「2010年までに世界、地域、国家の各レベルで現在の生物多様性損失の速度を大きく低減させる」ことを目標とした。しかし「生物多様性2010年目標」は達成出来なかった。

この反省に立ち「愛知ターゲット」では

2050年までの中長期目標（ビジョン）

2020 年までの短期目標(ミッション)

2020 年までに達成すべき具体的な5つの戦略目標と20の個別目標を設定している。ビジョンは「自然と共生する」世界であり、ミッションは「生物多様性の損失を止める為に効果的かつ緊急な行動を実施する。」としている。

新戦略計画の目標「愛知ターゲット」を達成する為に、まず2011年の取り組みが鍵を握る。議長国の動向が世界から注目されている。日本は生物多様性の重要性を認識して、５つの戦略目標と２０の個別目標を達成する為、速やかに「法」整備を行う。絶滅種を殖やさない為にも、具体的な行動計画を示すことが不可欠である。NGOなどによる政治家への働きかけが効果的である。

Ⅱ」世界から見える日本の森

今年は国連が定めた「国際森林年」。世界の森林面積は減少の一途をたどり、森林は劣化し森の荒廃が進んでいる。原因は国家レベルで自然改造事業が実施され、熱帯林.亜寒帯林の大規模森林開発に伴い森林面積が減少している。さらに山林火災や洪水などの自然災害が多発している。

土地の過剰な利用で森林の劣化が見られ、植物種が減って、不毛の大地が広範囲に出現している。　森林問題や環境問題の複雑さが分かる。世界経済のグローバル化が進むなか、第一次産品の生産国に頼る私たち自身の生活にも責任がある。

ウータンでは多くのキャンペーンを実施してきた。ベニヤ合板の使用を問う自治体キャンペーン、違法なラミン材の使用を止めさせたラミン調査会、熱帯林保護活動、違法伐採の禁止、違法材密輸貿易の禁止、先住民プナン族との情報交換、東南アジアの木材を輸入している日本企業への取り組み等がある。一定の成果が上がっている。ボルネオの森から、日本の森が見えてくる。人類の未来のために森の育成,保全,再生が必要である。水源の森を維持,保全,管理することが私たちの責務である。中国系等の外資による日本の森の購入が進み、さらに転売が行われている。林野の使用上の制約を決めた法律の整備が急務である。林業で生活できる山村社会を目指す為に、遺産相続に関わる相続税の問題など多くの難題がある。森の再生事業の取り組みが必要だ。

地球上に自然豊かな健康な森や川や海が在ることが生物多様性を支える基盤である。国際森林年を契機に多くの生物が生存できる自然豊かな森を作っていこう。

≪インドネシア中カリマンタン　タンジュン・プティン国立公園からの報告③≫

タンジュン・ハラパン村での村おこし

市川美穂

タンジュン・プティン国立公園で森林再生等に取り組む FNPF（Friends of Natinal Parks Foundation）と共に活動をするタンジュン・ハラパン村。この村は、村の名前のとおり希望(=ハラパン)の村だ。この村での取り組みは、これまでもウータン森の通信 93 号、94 号、97 号、99 号で紹介してきた。今回、2011 年 2 月に再度この村を訪れたので、村おこしのためのさまざまな取組の最新情報を紹介する。

（1） 植林のための苗木づくり

村には「SEKONYER LESTARI(持続可能なセコニア川)」という名前の苗木づくりのための協同組合がある(ウータン森の通信 97 号)。2009 年初めに村の有志 20 人ほどでつくられた。2010 年 3 月には、村の若者により、新たに同じ目的の協同組合がつくられた。今回、その後どうなったかを尋ねたところ、協同組合は 1 つの方がやりやすいとのことで、2010 年 9 月に合体して 1 つとなっていた。また、1 年前リーダーだったトッフィーが政府の役人となり、ルスタムが新たなリーダーとして選出されていた。数人のメンバーチェンジがあったものの、以前と同じ 20 人ほどで運営されていた。

2010 年に植林されたブグル地区の苗

そもそも、植林のための苗木づくりは、FNPF の活動であった。以前は、FNPF は苗木を誰にでも無料であげていた。しかし、FNPF のリーダーであるバスキはこれを村おこしに使えないかと思い立った。同時に村人たちも苗木づくりに興味を持ち始めた頃だったので、村で苗木づくりの協同組合が立ち上がったというわけだ。

2010 年 3 月、ウータンがこの協同組合から 4,000,000 ルピア(約 4 万円)で購入した 1ha 分の苗木(植林作業と 3 年間の管理費含む)は、国立公園内のブグル地区の乾燥土エリアで元気に育っていた。実はこれがこの協同組合が初めて自分たちだけでやり遂げた植林事業だ。植林された苗木は全部で 9 種類(ニャトウ、アガチス、マンギスフタン、スンディ、アマン、マダン、バランエラン、パポン、ジャリン)。すべて村人のチョイスだ。

苗床に水やりをする協同組合員

そして現在、この協同組合はブグル地区とパダンスンビラン地区の境界付近で苗木づくりに取り組んでいる。FNPF では、ボーイング社からの助成金により、このエリアに 2011 年から 3 年間で 40ha の植林をする計画があるからだ。ここには 4 種類(パポン、バランエラン、ウバールプティ、プライ)の苗木が約 16,000 個ある。

今回、私たちはこの苗床に訪れた。組合員は、この苗床に着くやいなや、一斉に苗木の周りに生えた雑草を黙々と取り始めた。そして、近くの水たまりからポンプで水をくみ上げ、丁寧に苗木へ水やりをしていた。水やりは 1〜3 日に 1 回の頻度で行っている。ちなみに、この水やり用ポンプは 2 年前にウータンが寄付したものだ。

組合員の給料は 1 日 50,000 ルピア(約 500 円)。働いた日数分の給料が支払われる。休みは金曜日。管理はすべて組合員のハットマットの仕事だ。

組合員のエムジャイに苗木づくりの協同組合についてどう思うか聞いてみた。1 番のメリットは、安定した一定の収入が得られるようになったことだそうだ。「以前は農業をメインにし、時々、日雇いで建物の修理の仕事をしていた。天候等によりお米が不作だった場合、以前は食べる物がなくて困っていた。今は協同組合から一定の収入があるので、不作の場合でも街からお米を買うことができる。建物の修理の仕事は 1 日 75,000(約 750 円)の収入が得られ、協同組合からの給料よりも高いが、毎日仕事があるわけではないので、毎日働ける協同組合はありがたい。」エムジャイは自分の村が好きで、自分の村から離れたくなかったから、パーム油プランテーションで働くことは選択肢になかったそうだ。

家のそばの苗床

組合員のマルサットへも同じ質問をしてみた。協同組合を運営することで皆の心が 1 つになれたと。

ジャワ島から採鉱のためにこの村にやって来た組合員のスカリ。採鉱の仕事はキツかったので、採鉱の仕事は辞めて、他の村人と同様、農業をメインにしていた。現在は、協同組合での苗木づくり以外に、自分の家の前で2,500個のガハル(香木の1種)の苗木を育てている。

苗床づくりを始めたばかりのリア

村を歩いてみると、スカリのように多くの家の前に苗床があった。1 年前はなかったのに！ これは、村人たちが「苗木づくりはビジネスになる」と思っている証拠に思えた。

苗木づくりは、組合員だけでなく、女性にも広がっていた。FNPF スタッフのアルバインの妻、リアもその 1 人。最近苗木づくりを

始めたばかりで、まだ売ったことはない。今までは子育て・家事以外に家ですることがなかったが、苗木づくりはその合間にできるからいいと。

1 年前と比べて、明らかに村での苗木づくりが盛んになっていた。FNPF のバスキは、この協同組合が FNPF から独立し、自分たちだけで運営していけることを目指している。現在は、少しずつノウハウを協同組合に移転しているところだ。今回、1 年ぶりに村を訪れてみてその着実な 1 歩を体感することができた。

（2） タンジュン・ハラパン小学校での環境教育

ウータン森の通信 99 号で紹介したとおり、2010 年 1 月から毎月 1 回、FNPF、村の小学校、村人の協働事業として村の小学生に対して環境教育が行われている。この事業はなんと1年以上続いており、今回 14 回目のプログラムに参加してきた。

子どもたちへの環境教育

村人の 7 割が風邪をひいている状況の中、環境教育は実施された。大人も子どももコンコンと咳をする中、子どもたち 23 人の歓声が響き渡っていた。風邪をひいてしんどい中でもこれだけ参加者が多いのは、子どもたちにとってとても楽しみなものだからだと思った。

進行は、1 年前と同じく FNPF スタッフのアルバイン。彼も熱がある中、頑張っていた。今回は、最近 FNPF が植林を始めたラマンドゥ地区で植林するための苗木の種集め。ラマンドゥ地区は白い砂地で乾燥しており、これまで FNPF が植林してきたブグル地区よりも植林が難しい地区だ。

子どもたちが集めた苗木のための種

子どもたちは熱心に種を集め、あっという間に袋いっぱいとなった。単に環境教育をするだけでなく、その成果が別の事業に活かされる。相互に連携した素敵な事業だと思った。

この環境教育事業、最近は他地域との交流が活発化しているそうだ。2010 年 10 月はタンジュン・プティン国立公園に位置するスンガイチャバン村の中学生 40 人をタンジュン・ハラパン村に招待して、村の小学生と交流・フィールドワーク。オランウータンも見たそうだ。11 月はパンカランブン（村から最も近くの空港がある街）の高校生が来てタンジュン・ハラパン村の小学生と植林活動。12 月はクマイ（村から最も近くの

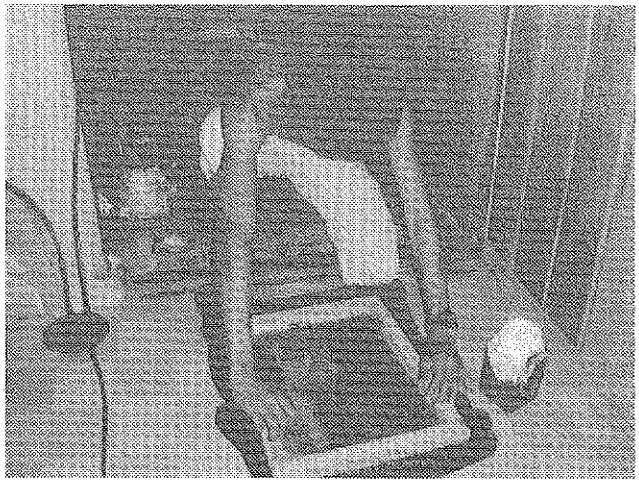
街)の小学校へ行ってそこで植林活動。2011年1月はタンジュン・ハラパン村での清掃活動。

交流した多くの学校からタンジュン・ハラパン村のように月1回環境教育を実施してほしいと要望があるそうだ。この環境教育事業が、他地域でも受け入れられ、重要だと思われていることがうかがえる。しかし、現状では、FNPFは環境教育事業に充てるための十分な予算がない。現在はタンジュンハラパン村に集中し、他の学校からの要望は断っている。

(3) エコツーリズム

タンジュン・ハラパン村には、苗木づくりの協同組合以外に、エコツーリズムの協同組合もある。

組合員は20人ほど。中心となっているのは、FNPFスタッフのアルバインの弟、バナー。2008年にFlora Homestayというロッジを作った。ロッジは1泊1部屋350,000ルピア(約3,500円)。予約は電話(0812 5164 727)かEmail(flora1.homestay@gmail.com)で受付ける。森の中でインターネットは無理かと思いきや、Emailは携帯電話でチェックできる。



また、2010年に政府からの援助を受けて、村の船着き場にお土産屋が建てられていた。そこで売られているものもほとんどが村人の手作り。驚いたのは、Tシャツも自分たちで作っていることだ。自分たちのデザインした柄(オランウータンや原住民の人々)を版画のようなもので1枚1枚Tシャツにプリントする。出来具合は湿気等に左右されるので、天候をよく見て作成する日を決める。Tシャツづくりを始めたきっかけは、村の外に住んでいる友人から教わったことだ。その後自分たちで試行錯誤しながら、上手に作れるようになった。T シャツに描かれたオランウータンはとてもかわいく、私も1枚購入した。この他にも伝統的なマッサージや国立公園内のトレッキング等、聞いてみるといくつかのアクティビティが用意されていた。

お土産屋に陳列されたTシャツ

タンジュン・ハラパン村への訪問は、私にとって今回が2回目であった。

前回はちょうど1年前。1年間で明らかに前進していていた。FNPFや村人の努力の結果が目に見える形であらわれている。できれば来年も行き、もっともっと村人たち本音を聞いてみたい。

(今回は村人の7割が風邪をひいており、思うようにインタビューできなかったのが残念!)そして、今後もウータンとして応援していきたいと思う。

世界の森林ニュース/World Forests News

2010年10月—2011年2月

by Nishioka

【中国—ロシアで巨大な密輸ルート摘発さる】

2010年11月イルクーツク州ロシア連邦保安庁と東シベリア税関の職員の取締り作戦成功の結果、ロシア人および中国籍の者が逮捕された。ジマ市鉄道沿い貯木場で、木材の加工と搬出を行う木材積換え地3ヶ所が摘発。25,000 m³の針葉樹が発見され、一部は既に鉄道、貨物車に積まれ中国へ輸送を待っていた。(フェアウッド News)

【サラワク、2020年へ100万ha ヤシ農園拡大】

マレーシア・サラワク州は2020年までにアブラヤシ農園を約100万haに拡大する政策を示す。土地の多くは二次林で覆われているが、泥炭沼沢林等の原生林と果樹園やゴム園も含まれる。土地開発・観光省大臣ジェームス・ウォンは、アブラヤシ農園への積極的な転換を検討。彼は11月、州政府がヤシ農園面積を現在の92万haから2倍の200万haにと。(資料:Illegal-logging News)

【サラワク首相一族、また疑惑】

ティン・チェック・シー社とトゥファイル・マフムド社間のシブ市裁判で、日本の投資企業ノダ(株)は、東京証券取引所見積りで数百万リンギットをタイブ州首相一族に騙し取られたと。トゥファイル・マフムドはタイブ首相の弟。サニャン・ウッド・インダストリーズ支出からハミダー・トレーディングを通し裏の利益を作り、ノダとトゥファイルは受託者義務違反と。ハミダー・トレーディング社はトゥファイルが娘、州首相の娘と共に協働株主で設立。ノダ取締役とトゥファイルは不正を全否定。(フェアウッド News)

【ベトナムも違法伐採相次ぐ】

ベトナムでは違法伐採が蔓延している。「今年ベトナムで2463件の違法伐採」とニュースが報道。伐採に取組む森林レンジャーが負傷し、4人死亡。ベトナムは近年の植林で、損失が緩和方向がある。FAO(世界農業機関)は、1990年から2010年間で森林面積が約5割増加も原生林は減少し続け、同期間で79%喪失。 (:Mongabay11月ニュース)

【EU違法材規制開始】

2010年10月11日、EUの「違法木材法(ITL)」がEU加盟各国における規制強化や必要な手続き等のための27ヶ月の準備期間経て、2013年1月に正式に施行されることとなった。同法は、EU加盟国のほぼ満場一致で承認された。反対票はスウェーデンとポルトガル。 (資料:ITTO news)

【政府、2020年に国産材利用50%政策へ】

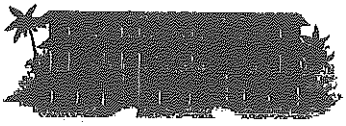
農林水産省は11月30日、第3回森林・林業再生プラン推進本部を開催。その中で森林・林業基本政策検討委員会の「森林・林業の再生に向けた改革」をまとめた。また「公共建築物等木材利用促進法」が10月1日に施行。同法は低層の公共建築物については積極的に木造化を、木造化が困難な場合は内装の木質化を促進し、2020年までに国産材利用を50%すると。関連して国土交通省官庁営繕部が「木造計画・設計基準」(仮称)の制定を進めて、2011年2月末迄に5回の検討会を開催し、まとめた。 (資料:日刊木材新聞)

【インドネシア、2010年末突然、新規造林許可】

ハサン林業大臣は合計約300万ha、44社への新規人工林造成許可を承認。許可承認をした大臣令が発布は2010年12月31日。これはインドネシア—ノルウェー間で10億米ドルの支援と引き換えに合意した森林開発モラトリアム規制の開始が予定の2011年1月1日の前日。両国間の合意に基づき、大統領令が発布される予定であったものの、開発規制対象に一次林のみならず、二次林や泥炭林も含むべきとの議論もある。大統領のサインが遅れたため?か。

また2010年10月、東カリマンタンで違法伐採して輸出していた大企業スマリンド・レスタリ社のボスが逮捕された件で、ユドヨノ大統領の義理の姉がスマリンド社を助ける発言したため、「ボス利権がまだ残るインドネシアで、ユドヨノ大統領もか?」との声が上がっている。 (2010年10月28日と、2011年1月27日 Jakarta ポスト等)

☆支えてくださる皆様へ☆



新年度からの会費の担当、井下です。
不況の中でも変わらずウータンを支えていただき、本当にありがとうございます。

ウータンが充分に活動するために、地球環境基金の申請など、活動資金の調達に努力してきました。　そのなかで、他団体と協力しつつ、インドネシアの違法伐採停止という成果を上げることができました。

インドネシアでの津波災害時には、被災地で活動する現地ＮＧＯの声に応えて、他の環境団体と共にウータンは、募金など支援を行いました。 今度は、インドネシアの人々がてをさしのべてくれています。

いま、皆様は、心を痛め、出来る限りの支援をしようとしておられることでしょう。ウータンスタッフも 同様です。（ネットで井上雄彦さんが描き続けた笑顔に、皆のコメントに、胸が熱くなりました）

一方で、日本の木材消費のため、大規模な森林破壊が起き、台風の被害が甚大になった国々のことも忘れられません。天災の上に人災をもたらしてしまいました。

森を守ることが、気候変動を防ぎ、人々の暮らしを守る。そう信じて活動を続けます。　今後もご支援をよろしくお願いいたします。

＜会費・カンパ等をいただいた方＞　（敬称略）　（2010.12.5~2011.3.20）

市井晴也　土田真弓　加藤直樹　後藤裕己　Ｓ．Ｉ．　下山久美子　西岡良夫
西園千春　橋本征二　藤岡正雄　平野誠　平井英司　福山一美　本田次男
柳下恵子　山田光一　由良行基周　ワタナベ・シン

＊領収書の必要な方は、お手数ですが、振込用紙にその旨ご記入ください。

＜おたよりから＞

☆「皮むき間伐」という方法があるのを始めて知りました。森がそのまま保管場所になり、低コストで運営できるそうですね。

☆地道な活動ありがとうございます。　こちら雪、今年は最大４．３ｍまで積もりました。

☆何時も新鮮な情報をありがとうございます。・・・遠くから、いつまでも続いて欲しいと願っています。

☆いつもありがとうございます。本当にすごい！

☆・・・子どもが大きくなったらオランウータンに会いに行きたい・・。

HUTAN ACTION SCHEDULE

☆☆ひらりんの勝手に100号サプライズ企画☆☆

「奇跡の海」～瀬戸内海・上関の生物多様性～
9名の方にプレゼント！
ハガキの宛先にウータン・ひらりん企画係と明記し、
下記のウータン事務局へ応募してください。
必ず、送付先住所・氏名を忘れずに。
「本希望」と書いてください。
5月末消印有効・6月中には発送したいと思います♪

2010年度決算

単位：円

収入		支出	
繰越金	1,202,231	会報製作費	177,450
会費	237,000	事務所家賃	144,000
カンパ	286,580	送料	71,575
地球環境基金（2009年12月～2010年3月）	1,712,000	他団体への協賛金	15,000
地球環境基金（2010年4月～2010年11月）	2,716,000	会場費	4,800
計	6,153,811	事務費	7,409
		海外調査CBD関連補助	250,000
		地球環境基金（2009年度分残金）	1,712,000
		地球環境基金（2010年11月まで）	2,716,000
		次年度へ繰越金	1,055,577
		計	6,153,811

森の救援基金

収入		支出	
前年度繰越金	887,132	植林支援金	20,000
カンパ	2,000	次年度へ繰越金	869,132
計	889,132	計	889,132

ウータン・森と生活を考える会

【OFFICE】〒530-0015 大阪市北区中崎西1-6-36
サクラビル新館308
「関西市民連合」気付
Tel.06-6372-1561
http://www.hutang.jimdo.com

【一部】300円 【年会費】4000円
【郵便振替】00930-4-3880

◎購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。
◎ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。

PRINTED ON RECYCLED PAPER